

《翻刻》『画口合相撲 地巻』（その一・全三回）

中 島 穂 高

本稿は、架蔵本『画口合相撲 地巻』の翻刻を収載するものである。なお同書については、既に拙稿「口合・地口の点帖」（堀切実編『近世文学研究の新展開―俳諧と小説』ぺりかん社 二〇〇四・二）において、書誌と、序の全文および本文の一部の翻刻を紹介しており、本稿の記述と重複する部分があることをあらかじめお断りしておく。

紙幅の都合により、掲載を三回に分け、今回は序及び「初日」の翻刻を掲載する。

解題

序者好華堂こと、大坂の読本作者山田案山子を中心とした山田社中による口合点帖である。「地巻」とあるが、他の巻の所在は確認できず、零本である。

口合とは、現在のシャレやダジャレに相当する言語遊戯のことでもともと上方で行われていたもの。江戸という地口にあたり、そもそも「地口」という名称自体が、「土地」の「口合」から来

たものであるとする説が有力である。本書における口合と、その本文（口合にもじる元の文句）ともに、雑多な古今和漢の故事・詞章・俚諺・常套句などから幅広く取材されている。

山田社中による口合本は、天保一〇年刊『画口合種瓢』や嘉永四年刊『画口合瓢之蔓』など数点が残されている。『種瓢』・『瓢之蔓』のいずれも、結社の人々の口合投句のみならず、口合作成の心得や禁忌その他の指南詳細を収載し、多色刷りの挿絵も一丁おきに盛り込まれ、それ以前にも以後にも類を見ない、口合本の集大成・代表格といふべき造りになっている。

『画口合相撲 地巻』は、題名にかかわらず挿絵のない写本であるが、社中の人々に投句を募り相撲句合わせの型式で好華堂の評とともに収載したもので、『種瓢』や『瓢之蔓』のように板本として成立する前の段階、いわば稿本の役割を果たすべきものだったのではないかと推測できる。評語に、「絵面に書とり難き句也」・「絵もむつかし」などのことが散見され、口合の評価が、口合自体の優劣とともに挿絵にした場合の描きやすさにも重きが置かれていたことが分かる。

ただし、これまでのところ、この『画口合相撲 地巻』を元にしたと思われる板本の所在は未確認である。『画口合相撲 地巻』の序の年時が弘化三年六月六日、山田案山子は同年十一月二四日に死去している。あるいは、『画口合相撲』を板本としてまとめるべく、収載する口合を収集・精選している途上、口合宗匠の死去により、板行が立ち消えになったのではなかるうか。

『種瓢』の口絵に、「画口合相撲開卷之図」として、大勢が集う中で一人がおそらく当座の会での入選の口合を詠み上げているところとおぼしき画が載っているが、この『画口合相撲 地巻』は、画に描かれた口合「興行」の実態として、口合社中がいかなる投句を集め、いかなる基準の下にその巧拙を判断していたかを示す、他に類を見ない貴重な資料であるといえる。

書誌

装訂 半紙本（二十四・一×一六・七cm）、写本一冊袋綴

表紙 柿色型押、題簽「画口合相撲地巻」

丁数 墨付七十七丁半、巻末遊紙三丁半

構成 序一丁半、「初日」～「五日目」に分かれ各日十四番計

七十番の口合句合わせ、見開きの右丁に口合、左丁に評語と点数。

凡例

- 一、本文はすべて原本通りとし、原本の面目を保つことにつとめた。
- 一、宛字・誤字・脱字・衍字・仮名遣いの誤り等も原本通りとした。
- 一、本文中、原則的に漢字の読み仮名・濁点・半濁点・口合の「東」「西」の別・口合作者の号・口合の点数が朱書されているが、それらは特記せず、口合の丁において漢字の読み仮名濁点が墨書されているものについてはルビで（ ）内に表記した。
- 一、序・評語・口合の題意、それぞれの行移りに「 」（スラッシュ）を入れた。

初日初番

逢は別とふる

東僧の哀れと泣 梅干

西僧の哀れと泣 梅干

東僧の哀れと泣 梅干
西僧の哀れと泣 梅干

東 西

翻刻

〔朱印「逍遙」〕

抑絵口合相撲の故事附と謂はむかしノ損得点評の御時聲高辛度聲
低唸ノ稱と申二人の好子まします互に点冠の主とノならんと句
題あらそひをなし給ふさるに依てノ角力の勝負をもつて点冠を
定めんとノ評議一決し聲高の御方には大他ノ言氣の阿度名といふ
大好の男を撰出しノ聲低の御方には少々物の欲男といふ(一オ)
ノ口上手の者を擇り出して双方句題定ノ相撲を催し阿唸互に
趣向をノふみかため龜評の上にて出し合つ、供にノ臟腑をもみ
合ける阿度名は大好のノ句者なれば相手合羽と投到さんと大汗
ノ流してよミ懸けるに欲男は題の口功者ノにて景色ノ故事取長文
句浮世絵劇(一ウ)ノ場句道戯句迄千變万化の絵を碎きノ遂に阿
度名を地点の底へ投下しける是にノよつて聲低好士を点冠の王
と定めしと申ノ此外故事附様々有と申せども余りくどきはノ御退
屈せん初番より勝負を愚判に入奉るノと管巻て申ノ

弘化三年ノ午六月六日(二オ)

(二ウ空白)

初日(三オ)

初日初番

逢は別となるへし

梅干

東 僧か哀れと泣敵 泣男

商人

西 野雨は菜種そ春めき 准句 (三ウ)

東 杉本佐鷹の空泣一わたり聞え候但し一句の表少し自他混ぜしやうなり泣敵といひては敵方が泣やうに聞え紛らわしし西春の野の菜種題乗よく申むねなしされば西を勝と申べし

東 二十点

(軍配印) 西 四十点 (四オ)

初二番

若紫や小むらさき

茂寿

東 若鷲卷た小柴垣 風雅の庵

玉光

西 わたるは浪間素佐々木 藤戸 (四ウ)

東 風流人の庵の小柴垣に鷲のまきし体風雅にて調ひ候西藤戸の盛綱も調ひ候東西とも申むねなき中に東ハ若の字小の字本文もたれ無念なり西を勝とすべし

東 三十点

(軍配印) 西 六十点 (五オ)

初三番

若紫や小むらさき

登龍

東 若馬溪間越ス早さ 玄德

しらぬはいこく物かなと

出多成

西 仕晴や智謀夜の籠 孔明 (五ウ)

東 玄德の檀溪を大体調ひしにをしむべし小紫と越す疾さ抑かけ合もあし西孔明が籠を増たる計略調ひ候此方本文のかけ合よければ西勝

東 二十五点

(軍配印) 西 六十点 (六オ)

初日四番

今はかひなき四つの糸

甲乙

東 司馬は敗なし蜀の智恵 死セル孔明生ル仲達はしらす

玉光

西 鹿は谷間に夜の色 山の鹿 (六ウ)

東 死せる孔明生る仲達を走す儀は聞ながら敗なすとの詞同聞なし敗北するとの意ながら言かた拙し西も夜の色の詞如何なれども鹿の声を聞んと待風流人の為には夜の色といふも無理ならざるか色は風情という意にて互に聞色なるべしされば色の字心ありよつて西勝ち

東 二十点

(軍配印) 西 三十五点 (七オ)

初日五番

日も早はるかにたけのほり

寿加丸

東 奇の業遅し風を乞 孔明

身は浮はしの浮寝にも

閉口

西 異な釣針の釣名譽 太公望 (七ウ)

東は孔明の風祈西は太公望の魚釣いづれも／名高き智者同士の手業句造も大体牛角／にて勝負分がたし東は東南の追手風西は渭濱の荒灘手取と上手の相撲なれば／行司の団もじつと持とす

東 四十点

西 四十点 (八才)

初日六番

いづれの人の移り香そ

哥仙

東 聞音も庵のつる瓢 許由

今やきてうと松か枝時ハ

屯

西 綺羅な衣装の枅掛翁 賀／振舞 (八ウ)

東 許由が鳴瓢調ひて申むねなし／西升かけの祝も調へども今やきてうと綺羅な／衣装のすこしかけ合薄きやうなり

よつて東を勝とす

(軍配印) 東 六十点

西 四十点 (九才)

初日七番

明行ま、にひま白く

里丸

東 風吹柳風雅の句 出口柳／其角／句

雛の旅路にやつれば

寿加丸

西 柴を刈し身学得られ 朱買／臣 (九ウ)

東 其角が出口の柳を見て傾城の賢なるはこの／柳かなと句を吐し

体絶妙の画才にて写す／口合にて思ふ所あれども句は題によく乗候／西朱買臣も聞え候へ共学得られとの詞少し／思はしからず学せられとあらは瑾なかるべし／少しのいたみながら甲斐なくて東を勝とす

(軍配印) 東 三十五点

西 二十五点 (十才)

初日八番

明行ま、に隙白く

茂寿

東 かけ拔佐々木駿馬に越

里丸

西 風吹灘に菱垣のる 番船 (十ウ)

東 高綱の先陣一わたり聞えたれどもま、にト／佐々木かけ合慥ならず／西灘目を乗菱垣船調ひて題によく／乗たりよつて西を勝とす

東 三十五点

(軍配印) 西 四十五点 (十一才)

初日九番

あれ水しまの花の色

登龍

東 影見る庭の和哥の井戸 井筒／業平

我丈

西 雨見る志賀の濱の規模 唐崎 (十一ウ)

東 井づ、業平の井戸調ひ候尤和哥の井戸との詞／如何なるやうなれど互に歌をよミしも名高ければ和哥の／井戸といふは無理なら

ざるべし／西唐崎の雨も調ひ候唐崎夜雨とあれば／雨の降は所の規模なるべし双方調ひし中に／花の色トかけ合しては和哥の井戸トあるより濱の／規模の方かけ合よし依て西かち

東 五十点

(軍配印) 西 七十五点(十二才)

初日十番

千とせ八千代の物思ひ

出多成

東 木曾で 獵男の夜の照射

准句

屯

西 実乗れは見事穂の揃ひ 當年／の／豊作(十二ウ)

東 木曾山の照射調ひ候／西豊年のさまも調ひ候へども字送りの口合／すこし聞えがたき例あり依て／東を勝とす

(軍配印) 東 五十五点

西 四十点(十三才)

初日十壹番

千とせ八千代の物思ひ

出多成

東 智もて解悟の大臣の詩

吉備／公

只身の程を思ひ續て

梅干

西 花見の比も野面に進て 野／がけ(十三ウ)

東 吉備公の野馬臺の詩を讀得られしも／調ひ候尤八千代のト解語の少し薄けれど／聞えずとも申がたし／西花見聞え候へども句

の落着つきがたく／つゞけてト進みてもかけ合慥ならず／東勝

(軍配印) 東 四十点

西 二十五点(十四才)

初日十二番

名にこそ立れ桜木の

哥仙

東 社の前で舞は神子 湯立

我丈

西 やしろを駈て猿田彦 准句(十四ウ)

東 神女の神樂舞調ひ候／西祭の鼻高も同断双方とも調ひし中に／桜木のニかけ合し見れば舞は神子の方は／薄く猿田彦の方ハ慥なりよつて／西かち

東 四十五点

(軍配印) 西 六十点(十五才)

初日十三番

人ミな軒の断り

商人

東 智慮には泣も嗚呼な士 泣男

世をも人をも恨まし

閉口

西 舞も地上の舞樂なり 椽の／下／舞(十五ウ)

東 泣男大體調ひながら申さば人ミなト智慮／には少しかけ合遠し／西天王寺の椽の下の舞能かひなし給ひて／申むねなし西勝と申べし

東 四十点

(軍配印) 西 百二十点(十六才)

初日十四番

あたし詞の人心

我丈

東 唐に碁の場も智の大臣 吉備／公

草かふ駒のいな、くや

甲乙

西 敬ふ四坐の庭神楽 住吉 (十六ウ)

東 吉備公の囲碁イゴ聞えて一句本文ニよく乗候ノリ／西住よしの庭神楽ニハカダラも

大体調へども難を申さは／駒コのト四座ヨの聊イサカながらかけ合かたし依
て／東勝

(軍配印) 東 五十五点

西 四十点 (十七オ)

(十七ウ空白)

(なかじまほたか 昌平高等学校非常勤講師)